

JOIプログラムは、国際交流基金と米国の非営利団体ローラシアン協会が  
2002年より共同で実施しています。



国際交流基金

JAPAN FOUNDATION  
国際交流基金 The Japan Foundation

国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年に独立行政法人となりました。日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむため、「文化」と「言語」と「対話」を通じて日本と世界をつなぐ場をつくり、人々の間に共感や信頼、好意を育てていきます。



ローラシアン協会

Laurasian Institution

「異なる文化を背景とする人々が協力し、意義ある国際交流環境を創造していく」ことを基本理念に、1990年に米国イリノイ州で非営利法人として設立されました。国際教育・異文化交流教育に主眼を置いたプログラムの企画・運営を行い、主にアジア・アメリカ・ヨーロッパ大陸間で文化理解を深めるための教育プログラムや情報提供に関わる事業を展開しています。

お問い合わせ

〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17  
Tel (03) 3712-6176 / Fax (03) 3712-8975  
Email: joi@laurasian.org  
<https://www.laurasian.org/joi>

詳細はこちら ▶

<https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/exchange/joi/index.html>



# 2023 JOI Program Yr. 19th Report

Japan Outreach Initiative

## JOIプログラム 19期コーディネーター活動報告

2年間の任期を終えた第19期(2021年8月～2023年7月)のコーディネーターから、それぞれの活動体験談を寄せていただきました。第1～18期の報告やプログラムの詳細はウェブサイトをご覧ください。

JOIプログラム

検索



## JOI第19期

(2021年8月～2023年7月)



岩本 彩  
Aya IWAMOTO

小学生の頃、好きだったマイケルジャクソンをきっかけにWe Are the Worldと出会い、国際平和・国際交流に興味を持つ。大学時代は米国ミシガン州へ留学し、現地の小学校で日本文化を教える経験をする。旅行で訪れたパラオでは、学校や教会でのボランティア活動に参加。日本文化の奥深さを知るとともに、やりがいを感じ、国際交流を通して、多くの人の人生に関わり、何らかのきっかけを与えたいという強い思いを持ち、JOIに応募。

社会人3年目、やはり自分のやりたいことに挑戦したいとJOIプログラムに応募しましたが、コロナの影響もあり、渡米が1年遅れたり、着任後もコロナ禍の中での活動開始となったりと、当初は制限が多くありました。しかし、そのおかげで、臨機応変に対応できる力が身に付いたと思います。今となっては、全てがよい思い出です。誰も知り合いない、オクラホマという土地に来て、2年間で数えきれない人に出会いました。私がオクラホマで日本文化を広げているというよりは、私のアウトリーチをサポートし、共に手伝ってくれるかけがえの無い人との繋がりができ、そのおかげでこの2年間で充実したものになりました。

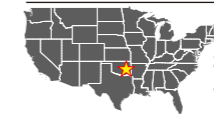
### 手作り臼と杵

私のメインのホストサイトはセントラル・オクラホマ大学(UCO)でしたが、第2のホストサイトであるオクラホマ日米協会向けに「お餅つき大会をしたい」と多くの声をいただき、私のホストファミリーの友達家族にお願いし、手作りの臼と杵を作っていただきました。木を伐採し、ワックス加工まで全て手作業で、約1ヶ月という短期間で実現してくれたこの家族には本当に感謝しきれません。



手作り臼の過程

# オクラホマで過ごした最高の2年間



オクラホマ州  
エドモンド/セントラル・オクラホマ大学

開催したお餅つき大会に招待し、沢山の観客が嬉しそうに楽しそうにしている瞬間を共有できたことは、私にとっても嬉しく光栄でした。地元の年間恒例行事にできるようにしていきたいと思っています。

### キッズサマーキャンプの創設

こちらオクラホマ日米協会向けに、2年に渡り、2度のキッズサマーキャンプを開催することができました。ホストサイトであるUCOのキャンパスを借り、9年生までの子供を対象に3-4日間の日本文化、日本語、太鼓、その他アクティビティを取り入れられました。地元ニュースにも取り上げられ、今までになかった活動を作り上げ、こちらも日米協会の年間恒例行事にできたこと、そして地域のボランティアの方に支えられて開催できたことをとても有り難く思っています。



学校訪問の様子

### 京の庭

1985年にオクラホマ州と京都府の友好提携が結ばれ、その記念として、オクラホマシティにあるオクラホマ科学博物館に日本庭園「京の庭」が贈られました。私がオクラホマに派遣されてすぐの2021年夏に科学博物館の担当者(ペリー氏)より修復したいと申し受け、京都府知事直轄組織に連絡を取り、京都からの庭師派遣に向けて取り組みを始めました。結果的に、国土交通省から補助金をいただけることになり、2022年の夏に庭師派遣と修復プロジェクトが正式に決定しました。それ以降、オクラホマ日米協会の全面的な支援のもと、2022年10月22日～30日まで修復作業及び完成披露会を行いました。



オクラホマシティ市長、庭師、オクラホマ日米協会会長、オクラホマ科学博物館担当者とプレオープン祝賀会の様子

また、「京の庭」修復において、政府関係者と科学博物館にプレ披露イベントとして、庭見学とお茶会を行い、一般向けに披露イベントとして、和太鼓、武道、書道パフォーマンス、お茶会、庭見学を行い、総勢で300名の方に参加いただくことができました。一般向けのイベントの際に、オクラホマ州知事より「京の庭」修復プロジェクトへの取り組みを賞して私を含め、京都の庭師、科学博物館関係者、日米協会の会長に感謝状をいただきました。オクラホマシティ市長がソーシャルメディア

で「京の庭」について取り上げてくださり、それをきっかけに地元のニュースや新聞から多くの取材をうけ、沢山の注目を末だ浴びています。依頼を受けた当初は、自身の出身の京都とオクラホマの関係強化に繋がるように取り組んで参りましたが、このプロジェクトを通して、地元の人々の温かさ、日本庭園を通して日本文化を伝える楽しさを実感することができました。体力的にはかなりきつかった約1週間でしたが、学びの多い、人と人との繋がりの素晴らしさと美しさを再確認できた素晴らしい時間でした。京都の庭師の方とは、頻繁に庭の状態の報告をかねて連絡をとっており、3年後に迎える姉妹州締結40周年に向けて、オクラホマ日米協会と協力しながら、後世に残していけるオクラホマ京の庭を作っていきたいと意気込んでおります。



手作りハッピーを着て、太鼓とソーラン節の練習終わりに集合写真！

### 乾杯 KANPAI JAPANESE TAIKO DRUM TEAM

オクラホマにある和太鼓チームに参加し、地元の学校、お祭り、イベントなどに参加、和太鼓を通して日本文化を広めてきました。その都度のイベントなどで集めた寄付で新しい太鼓を購入し、手作りのスタンドを作成し、チームとしても沢山の進化してきた2年間になりました。2023年1月にはオクラホマのNBAチームであるOKC THUNDERのハーフタイムで演奏することができ、チームにとっても素晴らしい経験と思い出になりました。和太鼓のパフォーマンスを通して、子供から大人、世代を超えて日本文化というものに興味を持ってもらえるようにこれからも活動を続けていきたいと思っています。

### 2年間で振り返り

楽しいことも、悲しいこと、大変なこともありましたが、何よりもオクラホマ、また遠隔からでも私のアウトリーチをサポートしていただいた方があってこそ素晴らしい2年間でした。活動の内容以外にも、人前で話すこと、コミュニケーション、広報活動など沢山の吸収ができたと感じております。この経験を活かして、今後の人生でもアウトリーチを続けていきたいと思っています。

## JOI(ジョイ)プログラムとは

日米草の根交流コーディネーター派遣(英名 Japan Outreach Initiative: JOI)プログラムは、米国の草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的に、地域に根ざした交流を進めるためのコーディネーターを2年間派遣する事業です。活動を通して日本の草の根交流の担い手を育成するのも本プログラムのねらいです。コーディネーターは、日本との交流の機会が比較的少ない米国の南部・中西部・山岳部の大学や日米協会をはじめとする地域交流活動の拠点に派遣され、その地域の小学校から大学までの教育機関、図書館、コミュニティセンターなどを訪れ、日本人の生活ぶりや、伝統芸能、日本語など、日本の幅広い文化を紹介する活動を行います。



岡村 奈々花  
Nanaka OKAMURA

大学では情報科学を専攻するとともに、教職課程と日本語教員養成課程を履修。資格が取得できるという理由で履修していた日本語教員養成課程であったが、学んでいるうちに日本語を教えることや、日本の文化を伝えること、国際交流に興味が増えた。大学入学当初より、塾講師として働いていたこともあり、教育分野にも強い関心があり、このような自身の経験や知識を活かせる場はないかと模索していたところ、JOIに出会う。

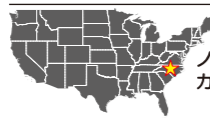
2020年3月に合格通知を頂いてから、私たち19期とJOIプログラムの旅は始まりました。新型コロナウイルス感染症の流行により、当初の予定であった2020年7月末の渡米を延期せざるを得なくなり、1年間のオンライン研修を経て、2021年7月末にやっと渡米することができました。羽田空港で初めて同期と実際に顔を合わせた時のことは今でも鮮明に覚えています。当時は日本でのワクチン接種が困難であったため、シカゴでの研修中に全員でWalgreens(ドラッグストアのチェーン店)に行きワクチンを接種したり、グループでの食事をできるだけ避けたりと、特殊な環境下での研修でしたが、それまでオンラインでしか顔を合わせたことのない同期やスタッフの方々とともに有意義な時間を過ごすことができました。

派遣先であるWestern Carolina University(WCU)のあるCullowheeという町については、インターネットで検索してもほとんど情報がなく、実際に足を踏み入れるまではとても緊張していましたが、温かい人々やグレートスモーキー山脈に囲まれた美しい地域に徐々に魅了されていきました。スーパーバイザーと派遣先に向かった日はあいにくの雨でしたが、「WCUには「We Carry Umbrellas!」という



WCUでのハロウィンおにぎりアクション

## ここが私のアナザースカイ in Western North Carolina



ノースカロライナ州  
カロウイー/ウエスタン・カロライナ大学

合言葉があるくらいこの地域は雨が降りやすいんだ」と教えていただきました。派遣当初は学生や教職員の方々にも「WCUの合言葉を知ってる?」と頻りに聞かれ、山々に囲まれた地域特有の気候にも徐々に親しみを感じるようになりました。

さて、WCUは1889年に設立された州立大学で、16の州立大学で構成されるノースカロライナ大学群の中では、5番目に古い歴史と伝統を誇ります。私が所属していたDepartment of World Languagesには、当時11名の教職員がおり、そのうちスーパーバイザーを含む2名が日本人の先生でした。学科には、フランス語、ドイツ語、日本語、スペイン語のプログラムがあり、日本語プログラムはスペイン語の次に大きなプログラムです。

大学内では、コーディネーターとして、日本語プログラム内外の学生や教職員向けに週に1度イベントを開催したり、日本語、芸術、言語学などの授業を訪問してプレゼンテーションを行ったりしていました。2年間、毎週異なるトピックでイベントを開催するのは大変でしたが、とてもやりがいがありましたし、学生たちが喜んでくれたのがとても嬉しかったです。



9th Annual Knox Asian FestivalでのJOIブース

学外では、周辺の図書館、K-12の教育機関、コミュニティカレッジ等を訪問し、より多くの年代の方々にも日本語や日本文化に触れていただくことができました。ノースカロライナ州西部にはCherokee(チェロキー)という先住民の地



地域初開催の日本祭り「Sylva Japan Fest」

域があり、その地域の学校にも何度も訪問して日本とチェロキーの言語や文化について子どもたちと一緒に学ぶことができました。彼らの言語や文化には日本の言語や文化と似たところもあり、そのような学びの機会を得られたことを非常に嬉しく思っています。

さらに、2年目にはノースカロライナ州だけでなく、テネシー州、ジョージア州、サウスカロライナ州でも活動をする機会があり、関わる人々や活動はさらに多様になっていきました。私の活動の中で、モップを使用した巨大書道パフォーマンスは人気を呼び、さまざまな地域のお祭りなどで、計10回以上パフォーマンスをさせていただきました。2年目の4月末には、地域で初めての日本祭りを開催し、人口2,600人ほどの町の公園に300名以上の人々が集まりました。WCUの学生ボランティアや教職員の方々、地域の方々だけでなく、在アトランタ日本国総領事館の方々にもご協力いただき、2年間の集大成として大成功を収めることができました。



モップを使った巨大書道パフォーマンス

2年間で7,692名の方にお会いし、「私」を通じて日本について教え、同時に「彼ら」からも多くのことを学びました。JOIコーディネーターとしての経験は、私の世界観を多様にし、また視野を広げてくれました。それと同時に私が関わった人々にも同じような影響をもたらしたと信じています。私がJOIコーディネーターとして行ったことが、彼らの心に永遠に残ることを願っています。



永井 麻莉子  
Mariko NAGAI

西南学院大学国際化学部を卒業。高校時代に福岡市と姉妹都市のカリフォルニア州オークランドとの交換プログラムに参加したことがきっかけで、海外と英語に興味を持つ。大学在学中は、短期語学研修や長期交換留学プログラムに参加し米国に滞在。社会人になり、東京で英語教育やコンベンション業界で仕事をしながら、高校生の時から強く抱いていた「日本と海外の架け橋になりたい!」という夢を実現するためJOIに応募。

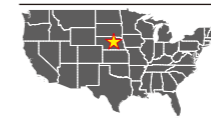
渡米してシカゴでの夏期研修を終えて、これから始まる2年間の生活を考えるとドキドキの気持ちでいっぱいの中、スーパーバイザーと一緒にリンカーン行きのとても小さな飛行機に乗ったことを最近のことのように覚えています。派遣先は人口約30万人弱のネブラスカ州の州都リンカーン市にあるネブラスカ大学リンカーン校(University of Nebraska-Lincoln、以下UNL)です。Global Partnerships & Initiativesという国際関係部署を拠点に、2年間、国際関係のイベント、留学フェア、日本に関するゲスト訪問時の補佐、提携校先との関係の発展の補佐、授業訪問、他部署とのコラボイベント、学外では、学校訪問、シニアセンターやコミュニティセンターへの訪問、地域の文化イベントなどを行いました。

2年間で特に印象に残っている活動をご紹介します。

### 1. 神戸大学からの短期プログラムに参加した学生グループの受け入れ補佐

2年目の夏、2週間の研修プログラムのため、神戸大学より20名の大学生・大学院生のグループが引率の先生方といらっしゃった際に、一部のプログラムと一緒に参加したり、皆さんの滞在がよりスムーズにいくようお手伝いをさせていただきました。これまで、学生として自分がプログラムに参加する立場だったのですが、今回、受け入れスタッフとしてUNLに来た日本人学生のみなさんをサポートできたことはとても良い経験となりました。日本人の学生と現地のUNLの学生が交流して各国の文化の違いについて学ぼうとしたり、交流している様子を見ることができました。私も、学生の時に短期留学したことや海外の友人ができたことがきっかけで、

## “There is no place like Nebraska”



ネブラスカ州  
リンカーン/ネブラスカ大学 リンカーン校



神戸大学の学生受け入れ時の写真

視野が広がり、また日本でも英語を学習し続けようとするモチベーションになりました。同じような経験を神戸大学とUNLの学生がしている様子を目の当たりにし、非常に嬉しかったです。

### 2. 学校訪問

1年目は、リンカーン市内の数校のみの学校訪問しかできませんでしたが2年目は、活動範囲を広げ、学校訪問の数も増え、また1回の授業訪問のみに限らず、リンカーンの小学校や高校で週1回5週連続の放課後のクラブも担当させていただく機会をいただくことができました。1回目から5回目まで毎回日本文化に関するクラブ活動の内容を考え、実施しました。特に、ある小学校での放課後のクラブでは、初めはなかなかうまく集中できずにいた子がいたのですが、最後の会の後に、私のところまで来て、お辞儀をしてお礼を言いにくたときは心がほっこりしました。また、「このクラブがきっかけで、授業で異文化について発表するテーマを日本にしたよ!」と嬉しそうにしてくれた生徒もいて非常に嬉しかったです。アウトリーチを通して出会った人たちの、日本に対する興味を引き続き高まることを祈っています。

### 3. コミュニティアウトリーチ

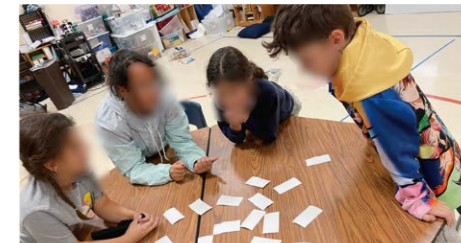
コミュニティアウトリーチの中で最も印象に残っているイベントは、オマハにあるローリッツェンガーデズで行われた日本祭(Japanese Ambience Festival)に参加した時のことです。1年目は派遣された直後ということもあり、ただ祭りを見学するのみでしたが、2年目には、UNLの学生とその時ちょうど短期語学研修のためにUNLに来ていた専修大学の学生にも声をかけ、ネブラスカ大学オマハ校(University of Nebraska Omaha、以下UNO)の



日本祭で富士山のレプリカ前でソーラン節を踊ったときの様子

Friends of Japanという学生団体と協働してソーラン節を踊ったり、各ブースでヨーヨーや金魚すくいなどをし、お祭りをさらに盛り上げることができました。私たちのブース出展やパフォーマンスは、ガーデン内にある日本庭園内で行いました。ソーラン節については、学生はそれぞれ授業の時間がバラバラだったので都合のつく時間をみつけて放課後限られた時間の中で練習をしました。中には初めてソーラン節を踊る学生もいましたが、練習を重ね、当日、UNOの学生たちと一体になり踊りきり、観客の皆さんから大きな拍手をいただいたときは達成感を感じました。ゲストの方もそうですが、一緒に協働した学生たちの笑顔を見ることができ、それは嬉しいものでした。

当日は、ステージ上ではなく、急遽、日本庭園内にある富士山のレプリカの前、草の上で踊ったことも印象的でした。



日本の食べ物についてカードゲームで学ぶ小学生の様子

このように、2年間の活動を終え、事前にネブラスカをインターネットで検索してもなかなか情報が出てこないのですが、実際に住み、活動を通して、日本とネブラスカの関係学ぶことができ、関係者の方に出会ってネブラスカを身近な場所とすることができました。派遣当初は、右も左もわからない異国の地で困ったこともたくさんありましたが、派遣先のネブラスカ大学リンカーン校の同僚を始め、現地に関わった全ての方には2年間本当に大変お世話になり感謝の気持ちでいっぱいです。派遣先の各所に“there is no place like Nebraska(ネブラスカのような場所は他にない)”という言葉があります。2年後に、この意味の言葉を理解することができました。今後は、ネブラスカは離れますが、何らかの形でネブラスカと関わりを絶やさないに行けたらと思います。



波多野 愛子  
Aiko HATANO

幼少期に母が在英米国大使館で書道を教えていた話を聞き、小学生の頃から日本と海外を繋ぐ人になりたいという夢を持つ。大学では社会学を専攻する傍ら、副専攻として日本語教員養成課程を修了。大学1年の夏にはアイルランドへ語学留学する。大学卒業後は会社に就職し、アメリカンビーフの輸入・通関デリバリー業務に携わり、アメリカにより強い興味を持つ。日本の良いものをアメリカに伝えたいと思い、JOIに応募。

JOIコーディネーターとしてノースダコタ州メイビルに住んだ2年間は私の人生において特別な時間でした。人との出会いとつながりを自分で作り、つなげる…それは私がずっとやってみたかったことで、2年間で成し遂げられたことです。



グランドフォークス日本祭りのブースでボランティアをしてきたメンバーがフェアウェルパーティに集まってくれました。次回開催に向けて動いてくれているメンバーです。ケーキにはWe will miss you Aiko!の文字が入っていて嬉しかったです。

〈小さな町・大学、なぜ日本人?〉

私は、ノースダコタに派遣された初のJOIコーディネーターで、人口1,800人の小さな町メイビルに住んでいました。ホストサイトのメイビル州立大学は全校生徒1,000人程の小さな大学で、学生も職員も大学のシャツを着ていてアットホームな学校でした。日本人が一人もいないだけでなく、外国語の授業もオンラインのみ、留学生もほとんどがスポーツで来ている学生という、想像していたよりもずっと日本文化どころか国際交流も少ない地域・大学で、なぜここにいるんだらうという疑問すらありました。そこで、日本に興味を持ってもらう前に、どうやって自分に興味を持ってもらえるかを考えました。Intercultural Clubでのフードイベントやアクティビティのほか、ゲストを呼んで、日本の音楽やアニメに触れてもらう機会も作りました。また、小学校教育専攻の授業にも訪問し、書道や

ノースダコタで人と人をつなぐ



ノースダコタ州  
メイビル/メイビル州立大学

折り紙を教えて、学生たちが先生になった時にアクティビティで使ってもらえるようにしました。学外の活動は、はじめは大学の教育学部を通して、公立学校にパンフレットを送ってもらって、連絡をくださった先生のクラスにランダムに訪問しました。子どもたちに人気だったアクティビティはおにぎり作り、折り紙です。徐々に活動範囲を広げ、学校だけではなく、老人ホーム、図書館、子ども向けイベントへの参加もしました。



ホストサイトで開催した子ども向けの1 Dayサマーキャンプで、おにぎり・お弁当を作る様子

〈ノウハウのインプットとアウトプットの繰り返し〉

2023年現在、ノースダコタ州には日本語を教えている学校がありません。1年目の秋頃、地域に住む日本人をまだ見つけられず、大きなイベントをしたくても、ボランティアを見つけるのが大変だと感じていました。また、11月前半から雪が降り、イベント開催が難しくなって活動に行き詰まっていた頃、在シカゴ日本国総領事館への訪問をきっかけに、ミネソタ日本米協会と繋がり、プログラムアシスタントとして、リモートで業務のサポートをしながら、コネクション作りやNPOの運営、イベントの企画・進行について学びました。総領事がファーゴにご訪問の際には企業訪問に同行させていただいたり、日本人留学生の連絡先リストをいただき、その後、一人一人を個人的に訪問し、人脈を広めていきました。ミネソタ日本米協会のお盆祭りやガーラ(ファンダレイジングイベント)に対面で参加したことは、ノースダコタでのイベント運営やファンダレイジングにとても役に立ちました。1年目が終わる夏頃にはノースダコタの都市・ファーゴの大きな広場を借りて、ボランティアを募ってお祭りを開催できるまでになりました。



ホストサイトの小学校教育のクラスで書道の授業をしました

〈日本文化を伝え続ける・サステナビリティ〉

2年間ずっと、どうしたら自分の任期後も日本文化・交流の場を続けていけるか、ということを考えていました。毎年恒例のイベントで日本のブースを持って活動を知ってもらい、イベントでは地元の企業や学生を巻き込んで、次も一緒にやりたいという人を一人でも多く増やし、繋いでいくことを意識しました。



ホストサイトIntercultural Clubのメンバーと国際文化イベントに参加した様子

活動の集大成となった、グランドフォークス日本祭りでは、夏に毎週末行われているファーマーズマーケットで元々地元の方が多く集まっているところで、現地のパフォーマー、ボランティアの協力を得て開催することができました。ステージパフォーマンスと自分たちのブース以外にも、既存のベンダーに日本関連のアイテムを作ってもらって、それが売れたらオリジナルステッカーをもらえる、ステッカーを集めると景品がもらえるという仕組みを作ったところ、協力してくれたベンダーが通常のファーマーズマーケットよりもかなり多く売り上げて、感謝の言葉を沢山いただきました。当日までどのくらいのスペースがあるか、どのくらいの人に来るかわからなかったのが、ボランティアの方々は色々な負担があったと思いますが、皆さん本当に楽しんでくださって、来年も開催したいと集まった新しいグループができ、嬉しく思っています。



グランドフォークス日本祭りのステージで地元の中学生が盆踊り(坂坊節)を披露した様子。ステージで披露した後、ステージ下で観客も交えて一緒に踊りました!授業訪問をきっかけに日本文化クラブを結成して、この日のために練習してくれました。

〈これからも続ご縁〉

JOIの活動だけでなく、生活面も支えてくださったスーパーバイザー、所属していた教会の家族たち、ボランティアをしてくれたり一緒に遊んでくれた友人に本当に感謝しています。極寒のノースダコタを嫌になれなかったのは、周りにいた温かい人たちのおかげです。帰国してから、ノースダコタから日本を訪問した方に会う機会が何度もあったり、再開をお手伝いした友好都市の交流事業に参加したり、ノースダコタで培った人脈は一生ものだと感じています。JOIで得たたくさんの出会いとご縁に感謝です。



山岡 舞花  
Maika YAMAOKA

幼い頃から習っていた琴や日本語教師の母の影響で日本文化を伝えることに興味を持つ。大学時代は、社会人類学を専攻し、国内やアジア、欧州、南米へバックパッカー旅行する。交換留学先の英国ウェールズでは、日本文化サークルで活動をし、イベントを企画する中で、Ambassadorと呼ばれることに喜びを覚え、大学卒業後は国際交流プログラムの仕事に従事。今度は、自分が日本を伝える事で人々に異文化理解の楽しさを伝えたいと思いJOIに応募。

私たち19期は、コロナの影響で1年間出発が遅れました。そのためメンフィスに到着した時には、「やっと待ちに待ったJOIがはじまる!」と胸が高鳴ったことを思い出します。

メンフィスはテネシー州の西端にある州第2の都市で、ミシシッピ川が流れています。気候は東京と似ていて夏は蒸し暑く、冬には時々雪が降ります。人々は温かくフレンドリーで、お店のレジ前で会計を待っている間には自然と知らない人同士で会話が始まります。そんなサザン・ホスピタリティ(南部のおもてなし)が感じられるメンフィスが今では第2のホームとなりました。

私の派遣先は2つあり、その1つがメンフィス大学です。中西部では数少ない日本語を主専攻とすることができる大学で、ここでは学生向けのイベントを開催したり、毎週金曜日の言語交換Language Tableをリードしたり、留学プログラムの支援やプロモーションに携わっていました。日本語を学ぶ学生は学内のイベントだけでなく、地域での活動にも積極的にボランティアとして参加してくれました。2つ目の派遣先はメンフィス・ボタニック・ガーデンです。96エーカーの広大な土地に30の庭園があり、特に大きいのが日本庭園の「静寂園」です。フィールドトリップで来る小中学生向けに、日本庭園でワークショップを行ったり、毎年の日本祭りやお花見祭りに携わっていました。派遣先の外では、地域の図書館や小中高、大学を訪問してワークショップやプレゼンをしました。遠隔地から招待を受けることもあり、ミシシッピ州、アーカンソー州にも訪問しました。6時間一人で運転したり、各地の日本関連の祭りで琴を弾いたりしたのは良い思い出です。

サザンホスピタリティに触れる



テネシー州  
メンフィス/メンフィス大学 メンフィス・ボタニック・ガーデン



学校訪問は好きなアウトリーチの一つでした

サステナブルな活動を目指して

JOIでは、「コーディネーターが派遣先を去った後も続いていく」サステナブルな活動を作るのが大きなミッションです。それを目指して力を入れた活動がいくつかありますが、その中の1つが、メンフィス大学の附属校で創設したJapanese Clubです。それまで大学には日本語学科がありましたが、附属校の小、中、高校には日本に関係するクラブや授業がありませんでした。そこでスーパーバイザーやアドバイザーの助けを借りて学校側に掛け合い、週1もしくは隔週で、放課後に言語や文化を学ぶことができるクラブを各校に作りました。チェスや陸上など、放課後クラブのシステム自体は学校に元々あり、その既存のシステムにJapanese Clubを追加できたことで、翌年も継続される可能性が高まりました。しかし、私が去った後もこのクラブを継続していく人材が必要でした。そこで日本語学科の先生と相談し、大学のインターシップを開講してもらえることになりました。それにより、このクラブの運営に携わってくれる人材を継続的に投入できるようになりました。そして副次的な成果として、2023年秋から中学と高校で日本語の授業が正式に開講されることになりました。これにより小学校から大学まで「日本について学ぶ」一連のフローが出来上がりました。「いつか日本にいきたい!」と欲しかった小学生が、将来日本語学科で学び、日本へ留学してくれることを願っています。



節分の豆まきは大人気でした

それから、姉妹都市締結に向けた取り組みもサステナブルを意識した活動の1つです。メンフィスには日本に姉妹都市がなく、当時の在ナッシュビル日本国総領事館の福嶋総領事が

掛け合ってください、東京都文京区との姉妹都市締結を目指すプロジェクトが始まりました。2022年秋には文京区の職員がメンフィスを訪問し、メンフィス市長や、在ナッシュビル日本国総領事と面会しました。その後、文京区と数ヶ月にわたって議論を重ね、両市の中学校と高校をオンラインで繋ぐ交流を2023年秋に行うことになりました。両市の学校の先生を集め、会議を重ね、プログラムの内容を考えるということを行いました。私が帰国後は、メンフィス大学の先生が引き継いでくださり計画を進めてくださっていました。このプログラムを皮切りに、両市の市民間交流が活性化し、将来的に姉妹都市提携が結ばれ、継続的な交流関係が構築されることを祈っています。



大人から子供まで一緒に日本について楽しく学びました

これらの他に、「誰もが参加できる日本を学べる場がほしい」といった地域の声から作った中央図書館のJapanese Culture Clubでは、1回目から老若男女45名が集まりました。そのような活動を認めていただき、2023年4月にはメンフィス市立図書館から年間ボランティアアワードをいただきました。またボタニック・ガーデンは、日本庭園にある1つのベンチに私の名前を刻んでくださいました。これら全てはスーパーバイザーやアドバイザーを始めとしたメンフィス大学、メンフィス・ボタニック・ガーデンの関係者の方々のおかげで達成できたことです。またプライベートでも素晴らしい友人、ルームメイトに恵まれ、大変充実した2年間を過ごすことができました。ここには書ききれないたくさんの思い出があります!ご支援いただいた全ての方々に感謝申し上げます。



毎年1人選ばれる年間ボランティアアワードをいただきました



山本 将大  
Masahiro YAMAMOTO

自身のサッカー好きの影響もあり海外に興味を持つ。大学在学中はメキシコへ留学。語学だけでなく、海外生活・異文化交流という点においても大きな影響を受ける。卒業後、より広い世界への憧れから英語の勉強もかねてアメリカへ留学。帰国後は外資系海外引越会社に勤務し、外国籍のお客様には日本の生活を、日本人のお客様には外国での生活を説明することで立場を確保。より大きな舞台で挑戦し、成長したいという思いからJOIに応募。

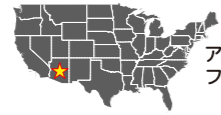
私はアリゾナ州、フェニックスにあるThe Japanese Friendship Garden of Phoenixという日本庭園に派遣されました。コロナ禍を乗り越えた末での派遣でしたので、アメリカ出発が決まったときの喜びは今でも覚えています。あの時、プログラムが中止になっていたらアリゾナでの数々の出会いや素晴らしい経験はありませんし、現在の自分もどこで何をやっているか想像ができません。それほどアリゾナでの日々は刺激的で有意義な時間でした。

ただ、全てが順風満帆だったわけではありません。庭園内での仕事は手探りで始まり、分からないことばかりでした。さらに、庭園外にも目を向け、様々な教育機関や団体との関係づくりも与えられた課題の1つでした。最初の数か月は暗闇を歩いているかのように、手ごたえが全くない日々でした。そのような毎日の中、上司含めて、同僚や庭師、高校の先生方に助けられました。上司からは仕事の面だけでなく、車の運転の仕方や、高速道路の乗り方、おいしいレストランや観光地情報など、生活基盤を整えるためのサポートをいただきました。アメリカ人庭師からは日本庭園は、石、植物、水の三大要素からできていること、石の形、季節の植物、



ボランティアのパワー

## 一期一会



アリゾナ州  
フェニックス/ジャパニーズ・フレンドシップ・ガーデン・オブ・フェニックス (鷲鳳園)

水の流れの3つの調和が重要であることを教わりました。また、高校の先生からは、ことあるごとに気にかけてもらい、授業に招待してくれたり、他の先生を紹介してくれたりとお世話になりました。派遣当初からこのような優しさに素直に甘えられたことが、JOIでの活動の成果につながった大きな要因だと思います。日本文化を伝えるに派遣されているにもかかわらず、人の話を聞くことの重要性を改めて教わった2年間でした。

このようなサポートもあり、庭園内、庭園外で大小様々な活動ができました。特に印象に残っている2つの活動をお伝えしたいと思います。



高校でのプレゼンテーションの様子

1つ目はある小学校での日本文化デーでした。このイベントは700人以上の生徒に対して日本に関するプレゼンテーションや和太鼓の演奏、侍パフォーマンスと盛りだくさんのコンテンツを提供しました。企画にあたり、どのようにコンテンツを組み込むべきかを先生やチーム内で何度も協議しました。その結果、生徒を3つの大きなグループに分け、その中の1グループを7つの教室に分割することにしました。これにより、1グループ目が7つの教室でプレゼンテーションにより日本文化を学び、2グループ目は太鼓の演奏を体験し、3グループ目は侍のアクションを鑑賞できるようにしました。それでも各グループ200人以上の生徒となり、安全面の課題や各教室を誰が担当するかなど、問題は多々ありました。ただ、学校の先生に動線の確認や生徒の暑さ対策などを協力してもらい、また、アリゾナ州立大学に短期で来ている日本からの留学生に各教室でのプレゼンテーションをリードしてもらったりと、役割を明確化し対応しました。そのおかげもあり、全てのコンテンツを満足いく形でお届けでき、イベントを成功させることができました。イベント後、多くの生徒たちがボランティアにサインを求めている姿を見たとき、このイベントが双方にとって楽しくそして意味のあるものになったと確信しました。

庭園内での七夕イベントも印象に残っている企画の1つです。このイベントは国際交流基金ニューヨーク日本文化センターからの助成金を活用し、アリゾナの夏を盛り上げることに成功し



ました。本イベントは和太鼓の演奏や盆踊りなど、伝統的なパフォーマンスはもちろんのこと、アニメを始めとしてポップカルチャーを目玉に企画の立案をしました。アニメ要素を含めることで、ターゲット層を従来の大人から若い世代に焦点をあて、新たな客層を得ることが最大の目的でした。その中で、七夕という伝統文化とアニメのポップカルチャーをどのように調和させるかに苦労しました。その結果、七夕について説明するポスターを作成し、お客様が短冊に願い事を書いて竹の木に掛けられるようにし、アニメグッズ販売店にはアーティストに協力してもらい七夕をモチーフにした作品を作成し販売してもらいました。おかげさまで、本イベントはお客様数とチケットの売上の両方で非常に満足のいくものとなりました。国際交流基金ニューヨーク日本文化センターからの助成金を活用し、イベントを成功させることで、庭園に少しでも恩返しできたかなと思っています。



侍パフォーマンスとともに

両イベントの成功の裏側には、日々の仕事をおろそかにせず、一つ一つの出会いに感謝し、少しずつ信頼を積み上げたことが実を結んだのだと思っています。暗闇を歩きながらも、愚直に仕事をした2年間は今後の指針となりました。これからもJOIの経験を活かし、日米両方の文化交流に貢献していきたいと思っています。



渡辺 洋子  
Yoko WATANABE

大学で幼稚園・特別支援学校教員免許を取得。卒業後、ニューヨークでの短期留学を経てグローバルビジネスへの興味が高まり、貿易関連企業の営業職に。国際交流体験を通じ、次世代のグローバル教育に興味を持つ。様々な問題を抱える子どもたちが、別の世界を知ること、自分らしい未来の選択ができるようになればと決意し、JOIに参加。

私の派遣されていたコロラド日米協会(JASC)は、1989年に設立されて以来、デンバーを拠点に日米ビジネス・教育・文化交流の機会を提供し続けている非営利団体です。設立から34年、今では理事会メンバー30名、企業会員約50社・個人会員400名以上にまで成長し、日系コミュニティになくはならない存在となっています。その中で私に課されたミッションは大きく分けて①JASCのアウトリーチエリアの拡大と、②JASCの年次大型イベントのサポートでした。



アニメフェスにてポップカルチャーの紹介

### ①アウトリーチエリア拡大

主な活動場所は学校・図書館・地域イベント等で、延べ206回/約9,400名の方に活動を提供してきました。トピックは伝統文化、季節の行事をはじめ多種多様ですが、長年文化を継承してきた方々が多くいるこのコミュニティで、新参者の私だからこそ注力してきたことがポップカルチャーの紹介でした。“若い世代が日本の同世代と話しやすい内容”をテーマに、芸術・食べ物・ファッション・音楽・旅行・インフルエンサーについて、伝統文化と対比させながら現在のトレンドの移り変わりを紹介しました。例えばteamLabの動画を見せると皆さん目と口を大きく開けて吸い込まれるように観ます。また、日本人にとってはポップというほどではありませんが、回転寿司の様子とそ

## 活動を終えて



コロラド州  
デンバー/コロラド日米協会

の価格に現地の方はとても驚かれます。観光地としてとても人気の日本。有名な場所や遺産はネットで簡単に調べられますが、私たちにとっての当たり前の日常も、現地の方にとってはすべてが新鮮です。

また、プレゼンの途中には自身の得意を活かしながらダンスアクティビティも取り入れていました。TikTokで流行った三代目 J SOUL BROTHERS のRat-tat-tatダンスや、NiziUのMake you happyなどを踊ると、生徒・学生たちは大盛り上がりで、心の距離が一気に近づきます。その一方で踊りたくないという子どもももちろんいます。でもソーラン節なら踊るという学生、私の親世代で流行った山口百恵や竹内まりやを聴くという学生もたくさんいるんです！若い世代にとって、“新しい=イケてる”わけではなく、何が現地の方の心にヒットするのか、手探りの日々でした。

現地には、家庭環境や経済面など、様々な困難を抱えている子どももたくさんいます。現実是非常に厳しいですが、様々な教育支援プログラムがあることも事実です。そしてそこにたどり着くためには、まず彼らが自身の可能性と人生の選択肢を知る機会が必要です。世界のひとつとして日本を紹介した後、生徒たちに自由に絵馬を書かせ、それをクラスメイトと共有してもらいました。色んな生徒と出会いましたが、家族の幸せを願う子、医者やアーティストになりたい子、日本に行きたい子、全員が夢や温かい想いを心の中に秘めていました。総勢600名の絵馬を目の前にし、未来を担う次世代をどのように応援できるか、考えさせられる日々はこれからも続きます。



子どもたちが書いた絵馬

### ②JASCのイベントサポート

JASCにはJapan Cup, Charity Golf Tournament, Kite Festival, Galaなど様々な大イベントが目白押しです。教育支援プログラムへのファンドレイジングを目的としたGolf Tournamentでは、Cultural competitionの企画・運営を任せられました。100名以上の参加者をゴルフコース上で待ち伏せし、突如Tik-Tokダンス・書道・カラオケ等のお題を振って競わせるのですが、全力で嫌がる紳士淑女たち。ですが、終わってみれば皆大笑い。今では「今年は何させられるの?(笑)」と話題になるほどこのイベントの目玉となりました。



ゴルフトーナメントにてTikTokダンスに四苦八苦する参加者

た。“文化”という言葉を使うとどうしても堅いイメージになりがちですが、複雑化するこの世界で、ただ友達のように共に笑い合う時間も、時には必要なのではないかなと感じています。一方、日本の伝統文化を継承することはJOIプログラムの最大の使命の一つです。



Galaにて着物ショーの様子

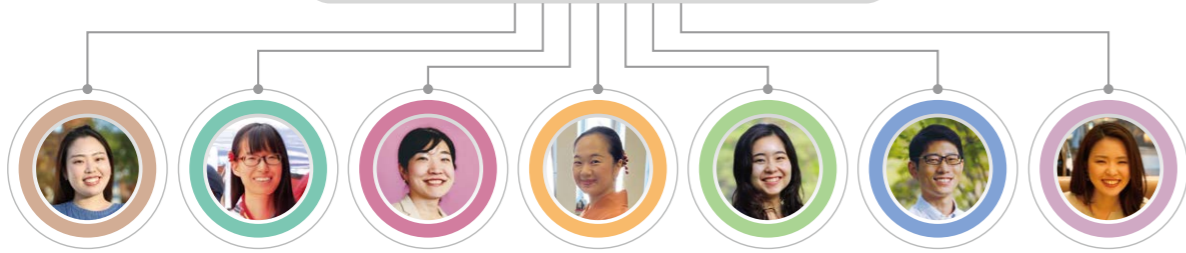
JASCにはAnnual Galaという年次最大のファンドレイジングイベントもあり、会場に設けられたステージでは毎年異なるテーマで日本の伝統芸能を披露しています。2022年度は私主導で着物ショーを行い、在デンバー日本国総領事やデンバー市長を含む200名以上のビジネス関係者にご覧いただきました。伝統的な着物と匠の技を紹介しつつ、サンフランシスコからリメイク着物のデザイナーも招き、着物がより身近になる演出に。私たちは着物とは何か、そしてそれがどれほど美しいかを知っています。しかし、日本人を含む多くの人々が、その美しさがどのようにして作られるのかわかりません。そこで、染め師や織り師などの技を映像で見せながらショーを実施。その超人的な技術に会場の多くの方が息のみ、着物の本当の価値を感じていただきました。とは言え、様々な理由で着物を着る人の数が減っているのも事実です。着物がもっと身近になることも今後の課題であり、同時開催したリメイク着物のショーを通じてそのメッセージを参加者に届けました。着物や小物はすべてコミュニティの皆さんのご厚意で貸していただき、モデルや着付に協力くださった方々も全員ボランティアでした。このようなご協力があったからこそ文化交流プログラムを実施し続けてこられた2年間。心からの感謝でいっぱいです。

# JOI Program

Japan Outreach Initiative

## コーディネーターリスト

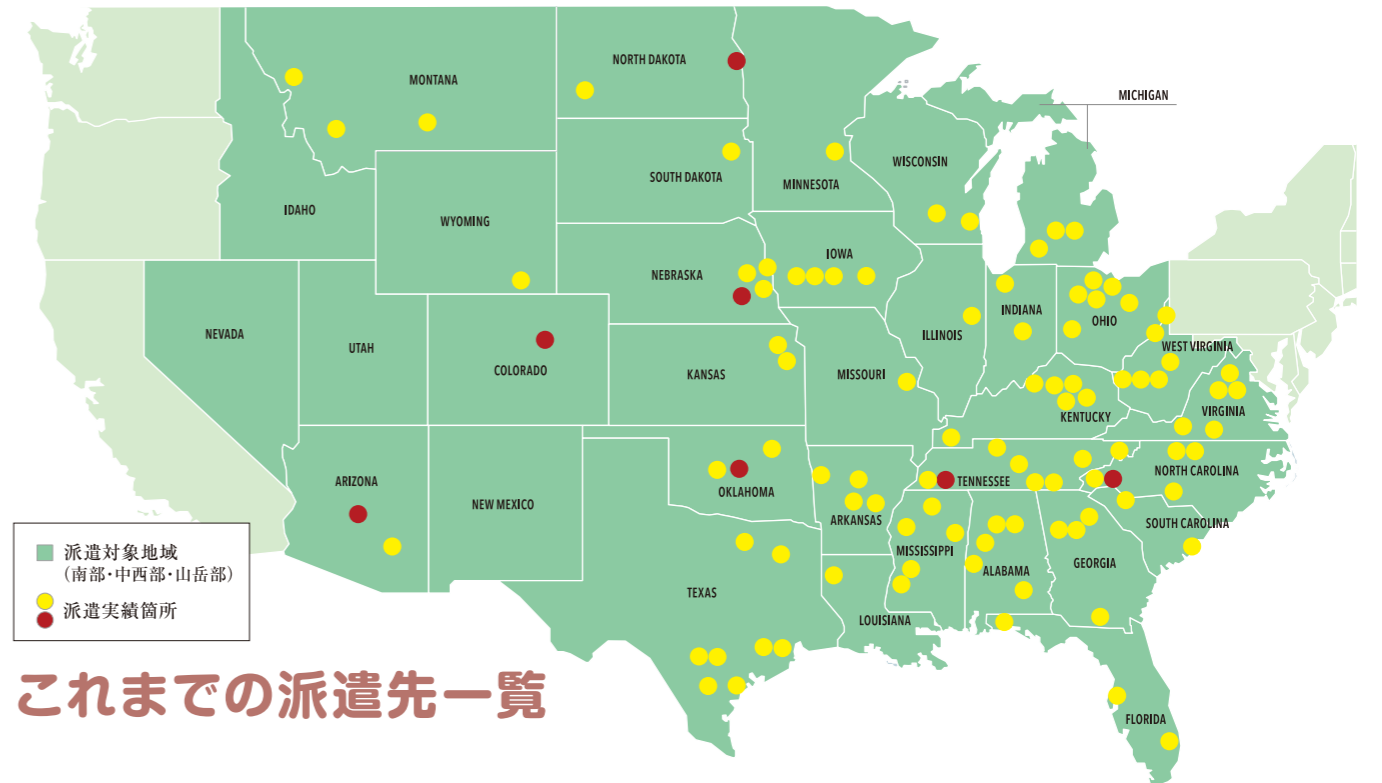
### JOI第19期コーディネーター



- 1期**
  - 小坂田 佳子 サウスイースト・オリガミ/スミス・アカデミー
  - 倉辻 厚子 中部テネシー州立大学日米プログラム
  - 久田 かおり アラバマ日米協会
- 2期**
  - 鈴木 丈夫 アーカンソー日米協会
  - 徳田 淳子 ミシシッピー・カレッジ
- 3期**
  - 高橋 祐子 ジョージア日米協会
  - 福原 くみこ ケンタッキー日米協会
  - 横野 由起子 タルサ・グローバル・アライアンス  
オクラホマ東アジア教育インスティテュート
- 4期**
  - 安藤 良子 ダラス/フォートワース日米協会
  - 村田 有紀子 コスタル・カロライナ大学
- 5期**
  - 織田 美千子 ベサニー大学
  - 木谷 公子 森上ミュージアム
  - 小島 祥子 アラバマ日米協会
- 6期**
  - 西脇 笑子 ウェスタン・カロライナ大学
  - 増田 環 サンアントニオ日米協会
  - 松下 佐智子 メンフィス大学国際プログラム&サービスセンター
  - 山崎 和子 ハリファックス公立学校区
  - 山田 悠花子 クロフト・インスティテュート・フォー・インターナショナル・スタディーズ
- 7期**
  - 荻島 光男 南フロリダ大学国際センター
  - 服部 聖 ジョージア大学アジア研究センター
  - 福崎 恵子 ケンタッキー大学アジアセンター
- 8期**
  - 青木 真子 ウェイク・フォレスト大学東アジア言語文化学部
  - 木幡 陽子 アーカンソー大学フォートスミス校
  - 森下 佳南 ウェブスター大学
  - 吉本 道子 ウェスタン・ミシガン大学曾我日本センター
  - 米倉 夏江 フィンドレー大学

- 9期**
  - 佐藤 嘉奈 ミネソタ日米協会
  - 日高 夢 アイオワ大学国際プログラム
  - 光林 瑠美 パルバライソ大学
- 10期**
  - 大野 麻美 グレーター・シンシナティ日米協会
  - 熊代 智恵 テキサス大学サンアントニオ校東アジア・インスティテュート
  - 鶴田 孝俊 ヒューストン日米協会
  - 星野 麻衣 ネブラスカ大学オマハ校国際プログラム
  - 松岡 愛美 ウォフォード・カレッジ
  - 山田 梓 マーシャル大学
- 11期**
  - 乗上 恵里香 カンザス大学ローレンス校東アジア研究センター
  - 蓮井 頼子 イリノイ大学東アジア・太平洋研究センター
  - 湯田 晴子 バージニア大学アジア・インスティテュート
- 12期**
  - 片岡 愛 バルドスタ州立大学
  - 庄寄 由紀 カルチャーオール
  - 中 博美 ウィスコンシン大学マディソン校  
東アジア研究センター
  - 仲野 麻美 テネシー大学チャタヌーガ校
  - 宮武 祐見 アラバマ大学タスカルーサ校
- 13期**
  - 岩田 千江子 ミシシッピー州立大学人文学科
  - 金田 紗弥 ミシガン州立大学アジア研究センター
  - 常盤 千明 インディアナ日米協会
  - 西村 瑛美衣 ケンタッキー日米協会
  - 野村 忠 クレイトン大学アジア・ワールドセンター
- 14期**
  - 澤邊 大輝 フェラム大学
  - 辰川 はる奈 ジョージア日米協会
  - 飛弾 文音 フィンドレー大学マツア美術館
  - 本間 恵 ウェストバージニア州教育省

## UNITED STATES OF AMERICA



## これまでの派遣先一覧

- 15期**
  - 大杉 治英 ケント州立大学
  - 村田 彩 ヘンドリックス・カレッジ
  - 山本 亜衣理 マーレイ州立大学
- 16期**
  - 奥 知奈津 テキサス大学サンアントニオ校
  - 小山 良夫 オースティン・ピー州立大学
  - 高瀬 眞太郎 マーシャル大学
  - 中嶋 綾子 ワールド・アフェアーズ・カウシル・オブ・ケンタッキー&インディアナ南部
  - 森下 加那子 ミシガン州立大学連合日本センター
  - 渡部 奈々 ウェイク・フォレスト大学人類学博物館
- 17期**
  - 上原 美奈絵 メアリー・ワシントン大学
  - 嶋口 仁菜 アジア・ソサエティ・テキサス・センター
  - 清水 千恵実 アーカンソー中央大学
  - 森 愛莉 トロイ大学
  - 山口 真宏 グレンビル州立カレッジ
- 18期**
  - 島田 優美 テネシー大学チャタヌーガ校
  - 新明 桐香 ノーザン州立大学
  - 末松 大輝 ジャクソン州立大学
  - 平下 真衣 ポーリンググリーン州立大学
  - 南 陽子 ウェストアラバマ大学
- 19期**
  - 岩本 彩 セントラル・オクラホマ大学
  - 岡村 奈々花 ウェスタン・カロライナ大学
  - 永井 麻莉子 ネブラスカ大学リンカーン校
  - 波多野 愛子 メイビル州立大学
  - 山岡 舞花 メンフィス大学・メンフィス・ボタニック・ガーデン
  - 山本 将大 ジャパニーズ・フレンドシップ・ガーデン・オブ・フェニックス(鷲鳳園)
  - 渡辺 洋子 コロラド日米協会
- 20期**
  - 青木 俊介 ディキンソン州立大学
  - 鮎川 友貴 ワイオミング大学
  - 梅原 瑞喜 デルタ州立大学
  - 川添 愛実 ウェストリパティ大学
  - 神原 ひと美 テキサス州立アジア文化博物館・テキサスA&M大学
  - 立尾 論世 フィンドレー大学マツア美術館
  - 早坂 武志 アイオワ日米協会
  - 久富 淑恵 カンザス大学
  - 森 薫 モンタナ州立大学ビルングス
  - 山本 由梨子 ケンタッキー日米協会
- 21期**
  - 窪田 美来 イースト・テネシー州立大学
  - 中野 真奈 クレイトン大学
  - 野田 歩伸 オクラホマ大学
  - 林 典子 アリゾナ大学
  - 福本 菜央 モンタナ大学ウェスタン校
  - 村松 舞奈 テネシー州アジア文化センター
  - 森安 幹男 ダラス・フォートワース日米協会
  - 山本 亜希子 ウェスト・フロリダ大学



ふれる。つながる。世界が広がる。

# JOI PROGRAM

日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム